

カザフスタンの捕虜 —収容から送還まで—

POWs in Kazakhstan:
From their Detention to their Repatriation

ヌルラン・ドゥラトベークフ*
Nurlan Dulatbekov

1940年代前半にユーラシア大陸で起こった戦争は、その被害と人的損失において比類がない。戦争開始とともに交戦諸国の将兵は敵軍の捕虜となった。捕虜の運命は常に、戦争の生み出す難問の一つであった。捕虜にかかわる国際法的諸問題を解決するために、1929年ヨーロッパ諸国の多数によりジュネーヴ条約が調印された。この条約には、捕虜処遇手続、給養の基準などが規定されていた。ソ連は、これを批准しなかった。

内務人民委員部（NKVD）捕虜・抑留者業務管理局（UPVI）管轄の捕虜収容所は、カザフスタンでは大祖国戦争の初期に設立された。最初の捕虜収容所は、1941年6-7月にカラガンダ州とアクチュビンスク州に設立された。双方とも、既存のグラウグ（GULAG / 矯正労働収容所管理総局）の収容所をモデルに組織されたのである。

この時期の特徴として、1941年末までは捕虜労働はさほど広範には利用されなかったことが指摘される。1941年末までに、UPVIに登録された利用労働力は約9000であった。

1942年末ドイツ国防軍がスターリングラードに釘付けになる頃までに、捕虜数が増加した。UPVIの収容所システムが捕虜増加に追いつかなくなった。同年11月28日付NKVD命令第002597号「捕虜の配置及び労働利用について」には、既存収容所の拡張と収容所の新設が盛り込まれていた。収容所の拡張・新設は1943年春に活発になった。カラガンダ収容所も拡張収容所の一つであり、1万人収容に規模を拡張する計画であった。収容所の拡張・新設はNKVDと労働力利用にかかわる諸人民委員部の責任でなされた。

1943年からUPVI収容所には番号が振られた。カラガンダの収容所はスパツスクまたはスパツスク工場の名で知られていたが、第99収容所と呼ばれた。アクチュビンスクの収容所は第222収容所と呼ばれるようになった。

スパツスク工場は1931年までカラガンダ地区の中心であった。1931年3月にはカラガンダ矯正労働収容所（Karlag）に引渡された。後にスパツスクには、カルラーグから分離、独立したパスチャヌイ収容所が設立された。カラガンダ炭田がカルラーグの門だとすれば、スパツスクは、病身の囚人が移送されて死を迎える共同墓地、「全連邦廢疾者収容所」だった。無数の盛土となった旧墓地が今日でも残っている。

捕虜の最初の梯団がスパツスクに到着したのは1941年8月のことで、その数は1436人だった。2年後に捕虜の数は、ほぼ2倍になった。収容所が存在した10年間に26民族、約4万人の捕虜が

* カラガンダ・ボラシャーク大学学長（カザフスタン）、Rector, Karaganda “Bolashak” University, Kazakhstan

入所した。

捕虜の到着数は、1944年後半に著しく増加した。同年1月の2529人から、10月の11583人への増加である。1945年10 - 11月には、日本人捕虜の5梯団11608人を迎え入れた。

収容所網も拡大し、南カザフスタン州にパフタ・アラル第29収容所が開設された。この頃、1944年9月1日までにアクチュビンスク・コンビナートに第222収容所を開設するよう指示が出された。収容人員は2500人とされた。

1943年4月から1944年12月にかけて、捕虜労働の系統的な利用が開始された。カザフスタンではアクチュビンスク冶金工場やチムケント鉛工場の建設、キンベルサイのニッケル鉱山、「カラガンダ・ウーゴリ（石炭）」のトラスト諸企業での採掘、パフタ・アラルのソフホーズ（国营農場）等に利用された。一部は収容所整備のための役務にも利用された。指示文書によれば、捕虜には100ルーブリまでの給与が支給された。

1945年ドイツ、次いで日本の降伏に伴って捕虜が大量にソ連領内に移送されると、収容所が200、分所が2713開設された。

捕虜は連邦のどこでも、国民経済の全部門で働いた。捕虜の貢献が大きかったのは、重工業企業の新規建設及び戦災からの復旧であった。カザフスタンで捕虜の強制労働が集中的に行われたのは、カラガンダ州と東カザフスタン州だったことに注目すべきである。連邦NKVDには、捕虜労働実施のためにOSMU（特別建設局）が設置され、工業プロジェクトの建設を担当し、労働力を各収容所に配分した。捕虜の強制労働は、多数の問題に直面した。強制労働システムそのものが、現場で労働力を利用する準備に欠いているという実情であった。

捕虜の収容所及び分所を維持する地理的範囲は非常に広大だった。それはカザフスタン全域に、北はペトロパヴロフスクから南はアルマトィまで分散していた。収容地区の区分は、戦中及び戦後の共和国における経済発展の重点を疑問の余地なく示している。カザフスタンにおけるGUPVI収容所の複雑きわまるシステムがどう作動するかは、何よりも捕虜数の絶えざる変動に依存していた。その変動の主たる理由は、NKVD / MVD（内務省：1946年3月から）システム内部の捕虜の不断の移送にあり、1946年以降は一部の送還にもあった¹。

カザフスタンにおける収容所人員の民族的構成は多様で、ソ連と戦争したすべての国の軍人を含んでいた。もとより、最大多数は二大民族グループのドイツ人と日本人であった。ほとんどの捕虜は労働年齢、すなわち18 - 45歳だった。カザフスタン捕虜収容所の民族的構成の広がりは、第2次世界大戦のグローバルな過程の反映であった。

ソ連は、大戦で被った甚大な人口喪失のために、労働力が著しく不足していた。捕虜は、侵略国による被害を補償することを求められた。捕虜労働の主な分野は、大工業プロジェクトや建設サイトだった。捕虜の大量利用は、技能を要しない様々な労働の作業現場だった点に特徴があった。捕虜は連邦のどこでも、国民経済の全部門で働いた。とくに大きく貢献したのが、工業企業の新規建設及び戦災からの復旧であった。

GUPVI統計によれば、捕虜は1947年春までに、主要経済省庁の労働力バランスにおいて顕著なウエイトを占めるようになった。航空機産業省の建設部門では全労働者の31%、燃料企業建設省で27.7%、建設資材工業省で24.1%、重工業企業建設省で20.1%、発電省で16.8%、非鉄冶金省で15.9%、東部石炭産業省で12.1%、西部石炭産業省で8.0%である。カザフスタンでは、カザフスタン精銅で38.6%、カラガンダ炭鉱で24.1%だった。

カラガンダ炭鉱は、捕虜の坑内作業を訓練するという大事業も行った。例えば1945年に1162

¹（訳者註）UPVIは1945年1月にGUPVI（捕虜・抑留者業務管理総局）に格上げされた。

人が講習方式で学んだ。内訳は後山225人、支柱工452人、組立工159人、コールカッター手85人、掘削労働者11人等である。このほか個別作業班ごとに1750人が学んだが、内訳は後山800人、支柱工200人、掘削労働者250人等である。

収容所指導部は、日々の作業命令を遂行するために、「自己の責めによりノルマを遂行できなかった捕虜作業班は、8時間労働を越えて、さらに3時間労働を続ける」よう指示した。現場には、特別な監視員が貼付けられた。作業班は、全員による無条件のノルマ100%遂行を義務づけられた。超過達成に対しては premia が与えられた。炭鉱では、一般労働者の組長が捕虜の作業を割増しする重大な違反もあった。1945年8月14日トラス「キエロフ・ウーグリ」の3番坑で、第2坑区の交替作業班は88トンのノルマに対し135トン（153.4%）を掘削することができた。メンバーは一般労働者5人、捕虜17人で、捕虜のうち10人は後山であった。この交替作業班には一般労働者の後山は含まれていなかった。組長は、非番の一般労働者がいたかのような報告を作成したのである。捕虜22人、一般労働者9人が働いていた第7坑区では、組長が採炭計画の達成を一般労働者によるものと記した。

カラガンダ市中央繁華街の「スターリン・ハウス」を建設したのは、日本人である。建設プロジェクトは連邦に分散しているが、日本人が建設した企業、建物、道路は今でも使われている。カラガンダの日本人建築物は約70年も経っている。カラガンダの建築的概観に対する日本人捕虜の貢献は、半世紀を経てもなお測り知れない。

ところで、1943-1944年、収容所には前線から送られてきた、かなり弱った捕虜がいた。NKVDは、彼らを身体的状態に応じて労働させることが必要だと強調した。捕虜は労働能力に応じて4つに分類された。第1グループは、健康で、重い肉体労働に就ける捕虜。第2グループは、持病をもつか、身体的に欠陥がある者で、肉体労働には部分的にしか適さない捕虜。第3グループは、持病ないし身体的欠陥が重く、軽作業しかできない者、第4グループは、持病ないし身体的欠陥が重く、働けない者である。

収容所の捕虜の死亡率はきわめて高かった。主たる病気は結核と栄養失調だった。バラックの衛生条件は非常に悪かった。収容所の分所などで捕虜の大量中毒が発生したこともある。中毒患者に対しては、適時に医療措置がとられなかった。例えば、第12、15分所では医務室に赤痢患者が96人いたが、3-4日間は何の治療も施されなかった。特別病院には常時1000～3000の患者が収容されていた。

バラックは、正常な気温を保つようにはなっていなかった。冬は常に寒く、外側のドアは閉まっていなかった。第17分所では、凍傷にかかった捕虜は44人もいた。うち1度14人、2度24人、3度6人である。捕虜が治療のため入院すると、貴重品（腕時計、指輪、現金など）は保管されないで、身につけたままだった。窃盗が発生しやすかったからである。

休日の収容所警備強化、あり得べき事故防止のために、捕虜が収容所外に働きに出ることが禁止された。休日には収容所内でも厳しい警備対策がとられ、監視所と巡回が増やされ、捕虜と抑留者のあり得べき脱走を防ぐものとされた。休日前には捕虜が一人ひとり所持品検査を受け、自分の居場所を見せて所持禁制の物品は押収されることになっていた。

カザフスタンに捕虜収容所が幾つあったのかは重要な論点である。幾つかの見解がある。ロシア人歴史家の提供したデータによれば、カザフスタンには1943年から1949年の期間に13あった。わが国の研究者の著作には、共和国内に存在した捕虜収容所の数について意見の一致はない。2008年に発表されたロシア国立軍事公文書館の修正データに従えば、1941年から1950年の期間に14以上あったとの結論が得られる。捕虜収容所の一部は常時存在したが、一部は具体的任務遂行のため短期間設置された。捕虜収容所の正確な数に関する疑問は未解決のままであり、今

後の詳細な研究が待たれる。

捕虜のカザフスタンからの送還は1945年秋に始まった。10月にパフタ・アラル第29収容所から、4408人の捕虜が帰国したのである。ドイツ人捕虜及び抑留者の本格的な送還は1946年に始まった。4月までにGUPVI機関は、ドイツ民族籍を除く捕虜全員を鉄道駅近くに集結させ、乗車と帰国に備えた。同じ頃、日本人捕虜の送還も始まった。日本人の一部が1945年日ソ戦争終結直後に解放されたことに留意するのは重要である。

カザフスタンからの捕虜送還過程は、連邦全体と同じ指示文書に基づくものであった。1947年には、カザフ社会主義共和国で、3捕虜収容所が解体された。1948年も、GUPVIは捕虜送還とカザフの捕虜収容所及び分所網の削減の事業を続けた。バルハシ第37収容所は、1948年3月31日付連邦内務省命令第00329号で解散された。それは、日本人捕虜1720名が祖国に送還された後に消滅した。

1949年初めまでに、共和国領内に残った捕虜収容所はカラガンダ、レニノゴルスク、アルマアトイ（分所）だけとなった。スパツスク捕虜収容所は6月8日付連邦内務省令により、特別収容所に正式に移行した。1950年には第99捕虜収容所も解散し、その分所はグラーク・システム下のペスチャヌイ収容所に移管された。

国際社会からの圧力により、国の指導部は捕虜釈放過程を促進せざるを得なくなった。1950年4月22日、日本人捕虜送還完了が公式発表された。5月5日タス通信は、ドイツ人捕虜送還完了にかかわる情報を伝えた。

カザフスタンにとって特別な出来事は、捕虜及び抑留者の強制労働セクターは戦後に精力的に形成されたことに注意すべきである。NKVD経済における外国人捕虜のウエイトは、グラークの囚人雇用に比して取るに足りない。それでも、最も厳しい情勢下でも捕虜を間断なく利用し、プロジェクトからプロジェクトへ急速に配置換えできる可能性を、経済指導者が評価したのである。GUPVI捕虜の労働生産性は年々向上したが、国民経済における利用効率は自由労働者の実績に劣ったのである。